

述べ床面積:7862㎡
 1F床面積:3321㎡
 2F床面積:2706㎡
 3F床面積:1834㎡
 建築面積:3500㎡

店舗
 ・パン屋
 ・花屋
 ・本屋
 ・八百屋
 ・カフェ

その他
 ・普通教室
 ・音楽教室
 ・面談・待機室
 ・児童館・託児所

建物高さ:5600 - 8400m

現在の都市環境において、こどもたちの遊び場は、効率性や利益を優先とした開発により確実に失われている。車社会により、一歩外に出ると危険な状態であり、通学路も安心して通行することはできない。

子ども視点から見て、現代のまちは豊かといえるのだろうか。

子どもにとって豊かな生活空間をつくることは、万人にとって快適なまちを創造することにつながるのではないか。



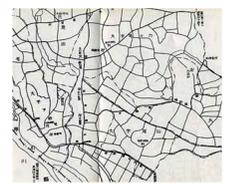
目次

1. 表紙
2. 敷地図
3. 平面図1F
4. 平面図2F
5. 平面図3F
6. プロセス+コンセプト
7. 配置図
8. 立面図
9. 立面図
10. 断面図
11. 断面図



世田谷区 尾山台
 用途地域:第一種低層住居専用地域
 建蔽率:50%
 容積率:100%
 高度利用地区
 街区面積:8206㎡

一般的な閑静な住宅街である。大正14年頃から始まった「玉川全門新地区区画整理」により、ほぼ正方形に近い街区が形成された。土地の起伏はほとんどない。
 近辺には小学校が2校、中学校が1校、保育園が2園存在する。しかし北方面には東急大井町線が、南方面には環状八号線が横断しており、2つの交通網に挟まれている状態である。子供の通行が多い場所としては、条件が悪く危険な地域といえるため、今回この敷地を選んだ。



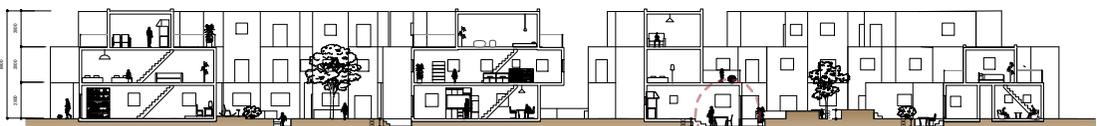


1F 平面図 1:150

中村 豊 No.2



A-A' 断面図 1:150



D-D' 断面図 1:150

中村 豊 No.10

中庭の事例

1. 江戸会所

近世は江戸(1624~1644年)の町人地(現在の日本橋区)は、寛政6年(約120m)四方で、中央に会所地と呼ばれる空地を持つ街区を形成していた。この空地は誰もが入れを所有する空地である。町人の生活の中心地として、中央に会所地と呼ばれる空地を持つ街区を形成していた。この空地は誰もが入れを所有する空地である。町人の生活の中心地として、中央に会所地と呼ばれる空地を持つ街区を形成していた。

進行距離20m(約40m)
京間40m(約120m)
のブロックを基本単位として、通りを挟んで一つの町を形成する。

敷地内には、奥の長屋などの商家にアプローチする通路が通された。この通路は誰もが入れを所有する空地である。町人の生活の中心地として、中央に会所地と呼ばれる空地を持つ街区を形成していた。

この会所地が有効に活用されなかった理由としては、まず閉鎖的過ぎる空地であることが挙げられる。町人に開放された空地であり、近頃は多く通りがけしやがった空地であったため、コミュニティも発生しなかったのではないかと推測される。

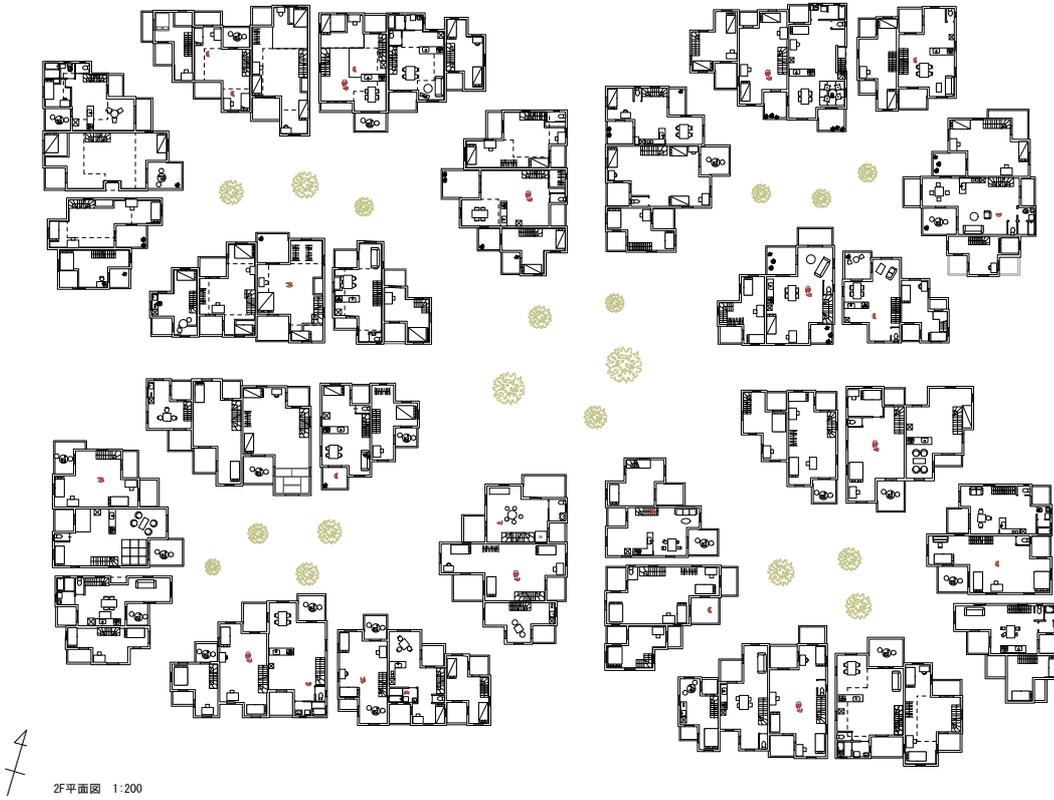


パルセロナ

パルセロナの中庭型(沿道型)街区は、中高層集合住宅が街区中央の中庭を囲む。1辺が113メートルある四角形が20メートルの道路を囲んで配置の目ように延々と並び、

「造成経緯」
この街区は高度経済成長期に、日照や風通しなどを重視し設計に重点を置いた。当時の都市計画であった。当時の都市計画であった。当時の都市計画であった。

現在、多くのセルガブロックの中庭は駐車場に利用されたり、モーター車を置くようになっており、中庭部分が埋められ、埋められてきている傾向がある。その空間の特性を生かす事無く、死の空間と化している。しかし最近、中庭を有効活用する為に、遊歩道や公園といった公共空間に実装する事により市民に開放しようという計画を打ち上げた。



2F平面図 1:200

3. 幕張

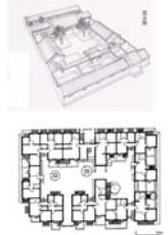
ヨーロッパの中庭型を引用したとされる。住居の沿道型配置による集合住宅で、大規模で総合的に相づくりを行った先進的なユニットである。中庭の配置が整然である。しかし、セルガタイプとは異なるがその街区の住人以外は侵入不可能であり、朝に対しては閉鎖的なものである。そのため、街区によっては中庭に人の気配はなく、子供の遊ばせる場もなかつた。ペイタワに於いては、中庭という特性だけでなく、閉鎖的のシステムも工夫も、成功の秘訣があるとされる。実際に訪れると、街全体は閑静に子供が遊ぶ場所もあり、バイクを引く遊歩道も整備され、眺めが良い。



4. 四合院 (伝統的住宅)

「正房(北房)」、「東房(南房)」、「西房」、「倒座(南)」という四つの部屋が真中の院子(中庭)を取り囲むように「口」の形になっている。外に通じているのは門だけで「四合院」である。門を閉めてしまえば、四合院は外の世界と遮断される。もともと宗族で居住していたが、文化次第で次第に多くの人が暮らす共同居住が始まる。集合住宅になった。部屋はもともと世帯ごとに進入行われていなかったから、各世帯が廊下や中庭に侵入して、各世帯が中庭を共有して、豊かな中庭を共有する機会が少ない。

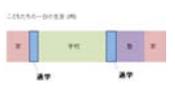
近年都市化が進むにつれ、高層化の対象となり、高層集合住宅に作りこみつつある。1989年、四合院の持つ空間的特徴の思慮が行われ、「寧波胡同」という四合院型集合住宅が建設された。住人に囲まれた中庭は、住人の階層の異なる階層が、いい雰囲気のコモンスペースとなっている。中庭に面した入り口を利用してコミュニティ空間となっており、四合院の良さが受け継がれているといえる。



設計における思考のプロセス+コンセプト

① まず、学童のところに「子どもの遊び」に重点を置いた保育園を設計した。そしてここでは、以前から持ち続けていた現代的都市における子供の遊び場に対する問題意識を、都市建築という媒体から考えたい、という思いから、この設計を行うに至った。

子ども(ここでは主に小学校低学年の児童)は、学校以外は塾に通うケースが増え、時間的にも遊ぶ時間がない。そこで、通学路に子どもが遊ぶことのできる空間を創出することを考えた。



② 敷地内に多く存在する狭小路に目を付けた。車の交通量は少なく、自転車の侵入する頻度は少ないため、しばしば子どもの遊び場として利用されるが、道路に面しているため、安全とはいえない。



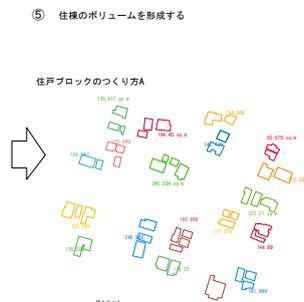
③ そこで、これらの狭小路を街区内で繋ぎ、中央に眺れをもたせ、街区内にヴォイド(中庭空地)をつくり、住宅地に安全な遊び場を創出することを考えた。



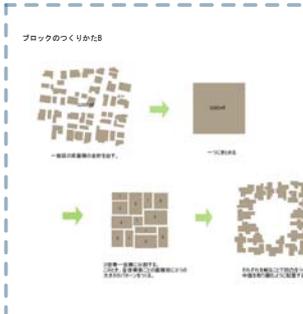
④ ヴォイド(中庭空地)をつくるには、その周辺の住宅を設計することとなる。同時に、中庭の外構も設計し、子どもの遊び場としての要素を揃えることとする。

現在の都市住宅地には、住宅が密集し、もはや空きは無いと言える。しかし、将来の指標をつくり、都市住宅地に共同の空地をつくることは、住宅地としての環境の改善、良質な環境の維持のために、必要なことではないかと考える。

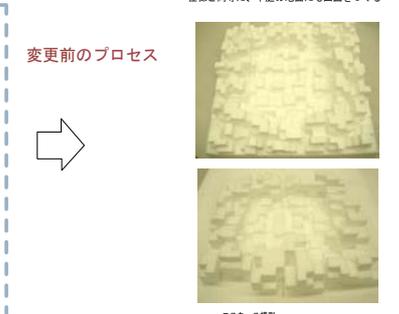
ヴォリューム(建築)ではなく、ヴォイド(空間)を先にデザインするという設計方法を試みた。しかし、やはり住宅を設計する上での様々な条件から、同時に進めていくことが良いと判断された。



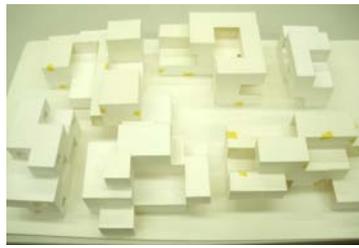
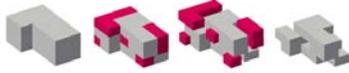
住棟をパターン化させたいと考えたため、面積を配分しやすいBの方法でブロックを造成する。



⑥ ポリウムを置き、回廊をつくることで、中庭をデザインする。住棟と同等に、中庭の地面にも凹凸をつくる



⑦ 凹凸をつくることで、それぞれの住戸への採光を確保し、多くの外部空間を創出し、中庭側や道路側、街全体に表情を持たせることができる。また、中庭空間は、広すぎても中庭として豊かにならない。

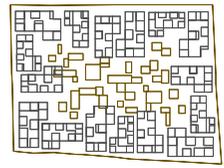


エスキース模型

⑧ 出来上がったユニットを中庭を囲んで配置していく。



大きな一つの中庭をつくる。



配置図

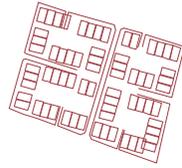


変更後のプロセス

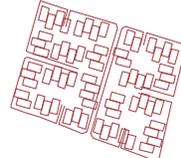
⑨ 中庭を細分化し、全ての世帯が中庭に面するようにする

一つの大の中庭を囲むと、中庭に面さない世帯が存在してしまう。また、中庭空間は、広すぎても中庭として豊かにならない。

よって、全ての世帯が中庭に面し、中庭を細分化させることを考えた。



既存の道路を残して、中庭を4つに細分化する。



一世帯ずつ、採光と通風を確保するため、交互にずらして配置する。

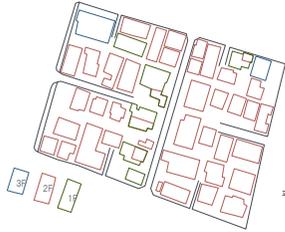


3つの大きさのバリエーションの住戸を決定し、それらを2-3世帯ずつ壁を共有させて配置する。



4つの中庭の中央に、中庭に囲まれた中庭が生まれず。

⑩ 住戸の大きさを決める。



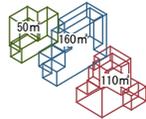
1F 延べ床面積合計3802㎡
2F 3359㎡
3F 272㎡
3802+3359+272=7433

合計延べ床面積 7433㎡
総住棟数 48住棟
(内集住5棟) 48棟-5棟=43棟
9+4+6+2+4=25戸

世帯数 43+25=68
7433÷68=109㎡
世帯平均109㎡

平均面積を中間数値として、3種類の大きさの住戸をつくる。

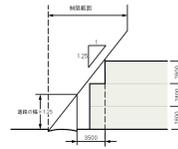
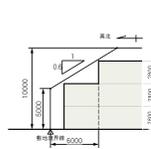
- ・50㎡ (1人から2人用) ... 23世帯
- ・110㎡ (3人から4人用) ... 25世帯
- ・160㎡ (5人から6人用) ... 18世帯
- 計 66世帯



⑪ 中庭側、道路側に表情を持たせるため、また採光を確保するため、住棟に凹凸をつくる。

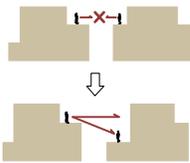
削る方法

斜線制限にかかっている部分を削る

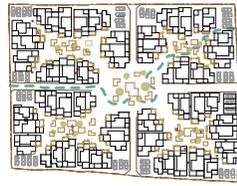


中庭に対しての圧迫感を抑えるため、また採光を得やすくするため、3階部分はそれぞれの世帯ごとに間隔を空ける。

ベランダが直線隣り合わないよう、高さをずらす。



⑫ 模型により採光や斜線制限、ベランダの位置を考慮して削る位置を決め手早く。

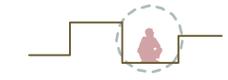


最終形配置図

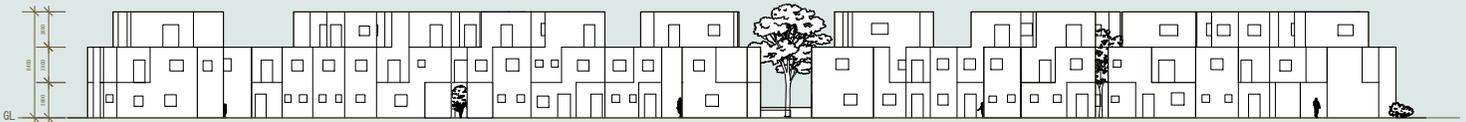
半開放的な中庭からまちにコミュニティが溢れ出す

従来の集合住宅などの共用中庭は、均質な建物の表層であり、中庭も均質な空間であるため、利用されにくい。

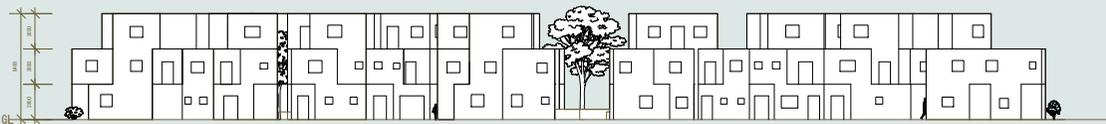
しかしこの様に、住宅にも地面にも凹凸をつくることで、まちに住む人びとの溜まるきっかけが生まれ、それはコミュニケーションが起るきっかけとなる可能性も秘めている。このような空間は、子どもの快遊さだけでなく、都市空間として豊かになるのではないかと。



溜まりの空間をつくる



北立面図 1: 150

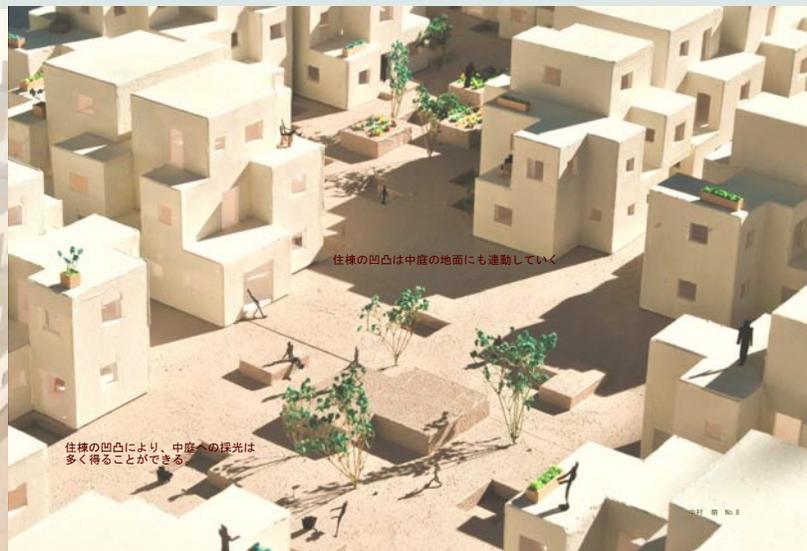


東立面図 1: 150



凹凸により、道路側にも表情が現われる。

半開放的な中庭空間は、箱を取り込み、また街にあふれ出す。



住棟の凹凸は中庭の地面にも運動していく

住棟の凹凸により、中庭への採光は多く得ることができる